た.

小倉記念病院は昭和23年厚生省に買収され,朝日新聞西部厚生文化事業団に経営が代わって，社会保険病院となり,昭和45年小倉北区貴船町に移転現在に至っており，小倉を代表する病院のひとつとして知られている.

楢林家の家系について

楢林家の家系は楢林流外科の開祖鎮山から外科家，阿蘭陀通詞案，別家，分家と家系の複雑さのため，史料の記載の異同が見られ判断に迷う点があったので，中西先生の指摘により，渡辺庫輔著の「嵜陽論攻」に拠った．ただ膨大な内容なので，関係分だけを略出した．鎮山の長男量右衛門は通詞家となり，弟の栄久が医家を継いだ．次いで栄哲豊矩で，栄哲(二代目)高茂，その嗣子 栄哲(三代目）高連の長男が栄建，次男が宗建である．栄建，宗建はともにシーボルトの高弟として知られているが，栄建は町年寄高島秋帆の疑獄事件に関連して，秋帆逮捕の天保13年，弟の宗建に家督を譲って京都に移住した．嘉永2年牛痘伝来に際し宗建より痘苗を受けた栄建は種痘接種に勤めた．京都では日野鼎哉が有名であるが，鼎哉は翌3年死亡している．栄建は明治8年死亡76歳，次代は建吉，その次が篤三である.

篤三氏は明治13年京都に生まれ，小倉に住み，大正5年から昭和36年まで昭和初期の大阪在住の数年を除き,死亡するまで40余年を小倉で小児科医として過ごした．夫人幸子との間に壽一，誠二，穎二（大塚家）の三子があり，誠二氏は戦死した.

壽一氏は大正4年京都に生まれ,父 篤三の小倉勤務により幼少時代を小倉市馬借で過ごして，昭和7年小倉中学を卒業，同年名古屋飛行学校に入学，二等飛行機操縦士となり，後一等飛行機操縦士，戦時中陸軍に応召して試験飛行，航空機輸送の後，航空局勤務，18年秀子と結婚，戦後運輸省航空局に動務．保安部，技術部を歴任，航空事故調査官として卓越した成績を残した．退官後大学教官や各航空会社嘱託など，平成5年死去した.

現在遺族は東京都に居住して，小倉には残るものはないが，大正，昭和を通じ約半世紀に亙り，楢林家の足跡を留めたのである.

37）三浦梅園の長崎旅行について

Travel to Nagasaki of Baien Miura (1723～1789 ; Confucianist)

○上瀉口　武
嶋村　昭辰
内田　康也
梶山　　稔
小林　　繁

Takeshi Kamigatakuti, Akitatu Shimamura, Yasunari Uchida, Minoru Kajiyama and Shigeru Kobayarshi

江戸時代の硝儒，三浦梅園（1723～1789）の旧居（大分県国東半島）に木製顕微鏡がある．この顕微鏡は二度目の長崎旅行の後，長崎の通詞吉雄耕牛から贈られたものであることが知られている．この長崎旅行は梅園二十歳代前半の旅行に次ぐものであった．梅園は安永7（1778）年二度目の長崎旅行に出掛けている．この年梅園は五十六歳であった．生涯の大作「玄語」を完成しており，総勢12名の大勢であった.梅園は厳しい学者としてより，医師の眼を通しての日記を残しているので，その「帰山録草稿」（岩波）により現在の市内にその跡をスライドで辿ってみた.

9月6日長崎に到着，翌7日は諏訪神社の大祭お宮日で奉納踊り，お下りを見物，道中をゆっくりして到着をお宮日に合わせたと思われる．この日，桜馬場の春徳寺を訪れている．訪問先は二百年後の今日も大体辿れるので，北から時計回りに回ってみた.

長崎駅の向かい側の高台に木連寺がある．住職が杵築の人で地縁があり，この間何度か訪れている．ここはサン・ジョアン・パウチスタ教会の跡であり，現在の県庁，西奉行所にあった「岬のマリヤ教会」，春徳寺にあったドートス・オス・サントス教会とともに長崎の三大教会といわれた．奉行所を挟んでそれぞれ脇街道，本街道の要衝の地を占めている.

続いて福済寺（三福寺の一つ，原爆で破壊）聖(霊)福寺，奉行所(現美術館)諏訪神社，松森(天満）神社，春徳寺（唐通事東海の墓があり，壮麗云うべからずと記している．またこの寺は書物改役としてキリシタン関係書物の検収所として後記

の中島聖堂と共に市中の取り締まりに当たる）中島川を下って伊勢宮，中島聖堂（祭酒向井玄忠，現在は興福寺内）興福寺，晧台寺，大音寺（キリシタンの人心を嘱すとある）続いて崇福寺（中国寺，三福寺の一，寺内に媽祖西王母，関帝など道教の祠を祭る．梅園の道教に対する傾斜）八坂神社，清水寺，梅ケ崎天満即大徳寺，十善寺（館内町界隈）など現在の名所散歩路にあたる．

その他，代官高木作右衛門宅でハルシャ馬，籌海図，明書など，大通詞吉雄耕牛宅に医学，薬方のこと，天文学の質疑，ケンペルの「日本記」，オランダ語の関心と日を惜しみ時を構わず日参する．一方市中では瀉血の施術を見る．耶蘇教への関心，或は禁書目など出発ぎりぎりまで努力した，一方松森天神近くの料亭（千秋亭）で再度に亙り，卓子を賞味する余裕があった．

この長崎旅行記を私考すると，梅園は若年より壮子，道教の影響を強く受け，両子山の麓に住み洞仙と称し，白雲青山の詩作，我子に黄鶴と名付け，西王母の讃を残している．つまり生活の教養，スタイルを道教で飾り，基盤としている．梅園の学問は大変難しく条理をもって物事をみるという，独特の哲学であるといわれ，凡人には理解の絶望的な学問といわれる．けど，この旅路においては難しい見方でなく旺盛な探究心を示し，若年の旅に見た道教を再び見て再三不縁となった夫人運を西王母に慰めを見たかも知れない．天主教，禁書目に対する旺盛な探究心は，耕牛はじめ向井玄忠など地元の人達に大変迷惑だったに違いない．梅園は後に耶蘇教の禁書目の著作がある．

梅園の氏神は天満宮で，そのせいか長崎でも天満宮を参詣し，旅路太宰府天満宮（梅園による三度参拝の旅）を回ってきている．梅園は著作の中では宗教に否定的であり，神は“じん”と読んでかみの観念は無いといわれるが，梅園そのものが天神を想起させ，また伊勢宮しかり，梅園の長旅は伊勢参詣と再度の長崎旅行だけである．最後に梅園は仏教にも信心深く，両親の墓参を欠かさなかったといわれ，墓は早逝の夫人とともに入り，寺は両子寺禅宗であり，梅園の人格の重層構造を改めて知ることが出来た．